

大正期の技術の粋を集めた中国地方一の長橋

旧霞橋

かすみ



岡山県倉敷市

明治初期、高梁川河口部にあたる^{つらしま}連島町（現・倉敷市）と対岸の玉島には橋がなく、「弁財天渡し」という船渡しで行きかいていました。これを不便とした小野九一郎は明治8年（1875）、地元有志による出資と官からの付与金で木橋（長さ291 m、幅1.9 m）を架け、「霞橋」と名付けました。因みに、工費は1502円余りで、通行料は歩行者5厘、馬車・人力車からは1銭を徴収する賃取り橋でした。

しかし、明治末期に倉敷市酒津の八幡山北麓で東西に分かれていた高梁川を統合する改修工事が計画され、霞橋は岡山県の買い上げとなって撤去されました。工事完成後に再び木造の仮橋が設置されましたが、出水ごとに木橋が破損するため、大正14年（1925）県会で鉄橋への架け替えが決定されました。

昭和元年に着工、同3年7月に開通した霞橋は、長さ616.7 m、幅6.36 mの13径間の橋で、7連の曲弦ワーレントラスと6連の単純鋼板桁からなり、手摺は全て鋳物製で照明は電灯29灯、親柱に16個つけられました。その様子を「観望の壮麗なる実に中国第一の名にそむかざるものあり」と新聞に報じられたように、当時の近代技術の粋を集めた中国地方第一の長橋で、自動車が対面通行できると有名になりました。当時は交通量も少なく、夏にはムシロを敷いて夕涼みをするのどかな光景も見られたそうです。

ところが一転して、戦後は復興と経済成長により交通量は増加し、霞橋は国道2号の重要な橋となり、昭和35年には建設省に管理が移りました。この時、高欄はガードレールに変えられるなどの危険防止が図られています。

霞橋は13トンの自動車を対象に設計されていましたが、車両の大型化により20トンを超す自動車も走るようになりました。このため修理の度に一方通行となるほか、昭和40年7月の集中豪雨ではピアの沈下やワーレントラスの変

形なども発生し、一時は徐行を余儀なくされました。

中国地方の重要幹線である国道2号の橋である霞橋が通行不能

になった場合、岡山県南の産業・生活への影響は計り知れず、急遽昭和41年度から新橋架橋事業が開始されました。旧橋の下流に建設された新霞橋は長さ642.7 m、幅12.5 mの連続箱桁橋です。旧橋では直角だった曲がりも解消され、安全でスムーズな通行が確保されました。

新橋開通後、しばらくの間は旧橋も自動車が通行していましたが、昭和60年に歩行者・2輪車の専用橋へと役目を変えました。その後、国道2号の交通量は増加の一途をたどる一方、山陽自動車道、山陽新幹線などの広域高速交通網の計画が進展すると、これらと連結する道路の整備が急務となりました。このため、昭和47年には岡山バイパスに接続する玉島バイパス事業が開始され、平成6年に暫定供用されると、国道2号はバイパスに移り、霞橋は国道429号の橋となりました。ちなみに霞橋の橋名の由来は、賃取り橋架設の大口出資者だった小野九一郎の雅号「竹霞」から、東岸の竹藪が霧に霞んでいたからともいわれています。

位置図



左岸連島町西之浦より望む旧霞橋と現霞橋

現霞橋は、旧橋の老朽化と県南地域の発展に伴う交通量の増大に対処するため昭和43年完成。



ワーレントラスの旧霞橋

昭和43年、下流側に現霞橋が完成し、今は歩行者と2輪車専用の生活に密着した橋となっている。